つばさこよみ４

本文使用書体：ヒラギノ明朝Ｐｒｏ

012

このあたりで僕達の永遠に終わらない話もおしまいにしようと思う。ここまでお付き合いいただいた方々には、乗りかかった船だと思って、もう少しだけ我慢をお願いしたい。

ことの始まりは春休みだった。

僕があの選択をした時点でバッドエンドと決まってしまった、あの春休み。

決定してしまったとはいえ、それでもできればハッピーエンドにしたいと思って努力をしているつもりだった。

ラブラブで。

イチャイチャで。

クチュクチュで。

ドロドロな。

高校生にしては、いささか少し度が過ぎたかもしれない――

刹那的な幸せ。

その一瞬のために僕と翼は求めあっていた。

少なくとも、その意味での僕達は十分以上に幸せだっただろう。

恒久的な幸せ。

その暖かさを求めて僕と翼は寄り添っていた。

少なくとも、その意味での僕達は――

どこにでもある普通の恋愛になるはずだった――

委員長の中の委員長と呼ばれた真面目な女と、どこにでも居るような落ちこぼれだった僕のような男。

落ちこぼれの男は化物になり、真面目な女は愛欲に溺れてしまった。いや、それは二人共だった。僕も愛欲に溺れていたし、それに――

そんな互いに依存した不幸な男と女の……あるいは幸福な男と女の物語。

不幸な僕こと――阿良々木暦は春休みに吸血鬼に襲われ、人間としての僕は死んでしまう。吸血鬼になってしまったのだ。

吸血鬼になった僕は地獄の二週間を過ごし――

羽川翼に救われた。

もちろん実際には忍野――忍野メメに助けられたことになるのだけど、それでも翼が居なければ僕は救われることはなかっただろう。

にもかかわらず、吸血鬼もどきとして美しき鬼の搾(しぼ)りかすと永遠に生きることを誓った男。

不幸な僕の恋人こと――羽川翼は、こんな言い方は酷いかもしれないが、本当に救われない生い立ちだった。

それゆえの真面目さ、それゆえの優等生。それだけではないのだろうけれど、その影響は大きかっただろう。しかし僕と出会った頃の彼女は結果として行き詰まってしまい――非日常(吸血鬼)を求めていた。吸血鬼は求めに応じ、吸血鬼は彼女を求め――

その結果、僕を、阿良々木暦を救うこととなった。

永遠を生きる男に、いや、永遠に犯された女。

そして忍野忍。

かつては怪異の王、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードと呼ばれた吸血鬼。かつて吸血鬼だった成れの果て。

そんな僕達のバッドエンドでハッピーエンドな話も、このエピソードでおしまい。

でも。

もちろん僕達はこれからもイチャイチャするつもりだし、喧嘩もするつもりだし、まあそれなりに生きていくつもりだ。――どこでまたバッドエンドになるかハッピーエンドになるかなんて、そんなことは死ぬまでわからない。

死ぬまで続けるに決まっている。

それが人生なのだろう。

勿論(もちろん)、吸血鬼もどきである、あるいは不死である僕達に死ぬことができればの話ではあるのだけれど。

013

「ねえ、暦。歯磨きって気持ちいいって知ってた？」
翼は僕のベッドに腰掛けながら言った。制服姿だった。いつものように学校帰りである。妹達は最近、気を遣って家に居ないことが多い。ありがたいけど、ちょっと気恥ずかしい。でも、やっぱりそれでも翼と二人きりになれるのは嬉しいのだ。
「ん？　まあ、口の中が綺麗になるのは気持ちいいけど」
「んっふっふ。違うんだよ。神原師匠から聞いた話なんだけどね」
翼は嬉しそうに言った。
ていうか師匠って。
そう、あの爽やかな変態こと神原駿河は、その周辺の女子に悪影響を与えまくっていた。ついに、とうとう——僕の彼女であるところの羽川翼にまでその毒牙が迫ってきたようだった。
「うーん、あいついい奴だけどさあ。お前さ、変なことされてない？　大丈夫かよ。僕は心配で心配で……」
神原って格好いいしなあ。正直なところ、格好良さで、いや、それどころか全ての面において勝てる気がしないし。
「ふふ、神原さん、いい子だよ。変なことなんてされてません！　変なことなんて暦にしかされてないもん」
翼の隣に腰掛ける僕。
「変なことって？」
僕は翼の後から手を回し、柔らかくて手に収まりきらない胸を、両手で優しく揉みながら言った。
「ほら、やっぱり暦の方が危ないよお。ていうか制服が皺（しわ）になっちゃうから駄目」

そんなことを言いながら、翼は僕の手を両手でつかんで胸から離し、スカートの上へ移動させた。それと同じように彼女は両手で眼鏡を外し、床に置いてある鞄の上へそおっと置く。

セックスをするときは眼鏡を外すからだ。眼鏡をしたまま愛しあったのは初めてのときだけだった。

「んー」

キスをせがむ翼。

それに応える僕。

「ん、でも、神原さん、多分、処女なんだよね」

翼は制服を脱ぎながら言った。

「だろ。翼の方が経験豊富じゃないか」

「えっへっへ、いやあ、でも経験と知識は違うからね」

そんなことを言いながら、翼は制服を器用に畳んで鞄の隣に置く。

「翼は知識だって――んっ」

怒ったような顔をした翼に、キスで口を塞がれる。

「もう、そっち方面は、暦と付き合うようになってから、多少は調べるようになったけどさ。なんていうのかな。神原さんはレベルが違うって感じだよ」

翼にそこまで言わせる人間なんて滅多に居ないぞ、おい。

「あ、でも私、経験も足りないよね――んっ……」

僕はブラの上から胸を揉みながら、耳を軽く噛んでから、首筋を舐めながら、

「そんなことないだろ？」

と、言った。

「くすぐったいよお――もう……」

何度しても、何度見ても、このこそばゆい感じで身を縮める翼は可愛い。だから、いつも長い時間をかけてしてしまう。

「――えっと、例えばさ、お口であんまりしたこともないもんね。男の子って、やっぱり、して欲しいんだよね？」

「え、だって――前にも言ったけど、僕は翼にそん

なことさせたくないんだよ」
僕は頬擦りをしながら、甘えながら言った。
「もう、いつもそうなんだから。暦だって、私の、えっと――その、してくれるじゃない。ずるいぞ」
頬擦りしていた僕を離し、僕の両肩を持ってしっかりと正面から目を見ながら、ちょっと怒ったように、ぷんぷんと言う。
「う――でも、なんかさ、えっちのためだけっていうか、なんか無理矢理って感じがして」
「私だって暦のこと気持ちよくしてあげたいの。そんなこと言わないでよ。勉強してきたんだよ」
僕は翼を抱きしめた。
強く。
僕達は抱き合った。
互いに、強く。
――僕は翼に頬擦りしてから言う。
「あ、あのさ、じゃあ、お願いしていい？」
「えっ へー、うん、じゃあ……」

僕はトランクスを脱いでシャツ一枚という姿になってしまう。翼は下着姿である。
僕の下半身に顔を向け、恐る恐る、僕の先端を舐める翼。僕は三つ編みの髪を撫でながら解いた。少しだけ見えるうなじがとてもセクシーだった。
「あは、しょっぱいよ。暦のお……お――おちんちんって、こんな味するんだね。じゃ、するね――」
翼の口から初めて聞いたかもしれない言葉。恥ずかしそうに言う翼を見て、僕は更に興奮してしまう。
ぺろぺろと。
ちゅぱちゅぱと。
くちゅくちゅと。
れろれろと。
舌を絡みつける。
舌が絡みつく。
僕の敏感な粘膜を愛してくれる。
少しずつ、深く。
少しずつ、大胆に。

――それは、あまりにも。
あまりにも――背徳的だった。
優等生で。
委員長の中の委員長で。
真面目な――
そんな彼女が、そんな翼が、僕を、こんなにも献身的に愛してくれていた。
いや、いつも愛してくれるし、僕も愛しているのだけれど。
――いつもとは違う、気持ちいい感覚。
翼の柔らかな髪の毛が揺れる。はらりと一束、また一束と乱れる。いつもは、学校では三つ編みの彼女が今は、こんなときは解いているから。まあ、いつも僕が解くんだけど。だから、僕しか知らない姿。そんな髪の毛を撫でながら、僕は翼を愛おしく思っていた。
こんなことまでしてくれるなんて――
「んっ、う、ん、ん、んぐ――ぷはっ、どう、気持ちい？」
僕は言葉にならず、どうしようもなくなって、押し倒してしまう。頬擦りしながら、強く抱きしめながら。
「ど、どうしたの、もう、暦、痛いってば」
興奮した僕は翼の下着を最短の手数で脱がした。左手でブラのホックを外し、同時に右手でパンツを脱がす。もちろん翼も協力してくれる。ホックの外れたブラを自分で外し、パンツは脱ぎやすいよう腰を浮かしてくれ――そういえば最近、ちょっと翼の下着が変わってきていた。出会ったころは純白で清楚なものだったけれど、今は少しだけ布地の面積は減り、ちょっとだけ控えめなフリフリだったりすることもあって、可愛いさとちょっとだけセクシーさが増した（それでも清楚さの方が上回っている）ものになっている。それを翼に言うと、本当に嬉しそうに照れてくれるのだった。
僕もシャツを脱いで僕達は何も身につけていない

状態になる。
「ねえ、僕もするよ。一緒にしよう」
二人で横向きに寝て、僕は翼の腰を引き寄せ、彼女の片足を上げ、その間に頭を入れた。その付け根の中心を舐める。翼も僕を愛してくれる。この体勢は初めてだった。
僕は丹念にそこを舐めた。太ももから付け根に向かって、全てを。谷になった部分は特に入念に舐める。深い奥の部分は指で愛した。小さく充血して少しだけ大きくなった部分は丁寧に剥いて舐めた。翼も僕を丁寧に愛してくれている。
翼は僕を強く吸った。
僕は耐えきれず何度か痙攣しながら、翼の口内に射精してしまう。
あまりの気持ちよさに陶酔する。
翼――
愛してる――
「くっ、うっ――つ、翼……」
意識が飛びそうになる。
「――う、にが」
でも、僕はその声を聞くと一瞬で意識を戻し、すぐに起き上がった。
「ご、ごめん。ほら、いいから、出して。ほら、ぺってして！　ぺって」
左手を彼女の口の前に出すと同時に、手早く右手でティッシュの箱を手繰り寄せる。
「んー」
翼は涙目になっていた。
「ほら、いいから！」
「――ぺっ……うう、男の子って飲むと嬉しいんだよね。ごめんね、飲めなかったよ。苦くて……でもちょっとは飲んだよ、んー、イガイガするー」
「翼、そんなこと無理にしないでくれよ」
僕はティッシュで処理してから、翼を抱きしめて言った。
「私だって暦に色々してあげたい」

「つ、翼――」
僕はもうどうしようもなくて、押し倒し、青い臭いのちょっと苦いキスをしながら一つになる。
付け根を限界まで交じえる。
翼は身体を弓なりにしてしまう。
「ん、んぅ、もう、いきなり奥は駄目だよ」
「ごめん、我慢できなかった」
「えへへ、優しくして……ん、ん。……ん。ん」
一体感に満足した僕は、キスをしながら、ゆっくりとした。
「……ん。……うぅ。……んん。……ぅ」
恍惚の表情で身をゆだねてくれている。
身体の全てを。
身体の中、体内までも。
「翼……」
僕を受け入れてくれている部分は深い傷口のようだった。触れたら痛いんじゃないかと思うくらいの、生肉のようにも思える濡れた粘膜。敏感そうなその部分に触れると翼はピクンと跳ねる。
浅い部分を、深い部分を、全ての壁面を、全ての空間を――丁寧に撫でるように、翼の中身をこそげるように、何度も何度も愛した。
翼は気持ちよさそうにうっとりとした表情で、僕の名前を、深くするたびに嗚咽のような気持ちいい声を、僕を愛してくれているという言葉を、何度も何度も聞かせてくれる。
そんなことをゆっくりと繰り返していた。
僕は、エアコンのリモコンを強にする。
いつものパターンだ。
ピッという電子音に気付いた翼は、ぎゅっと僕に強く抱きつく。しがみつく。離れてしまわないように。僕ともっと一つになるように。全ての隙間を埋めるように。大きく柔らかな胸が、更に押し潰されて変形する。
それを確認した僕は激しく動いた。全身を密着させ、体液だけでは飽き足らず、体温までも交換する

ように。叩き付けるように。乱暴に。
翼も協力してくれている。
僕は翼の肉付きのいいお尻のほっぺたを鷲づかみにして揺らす。
僕は翼の背中から肩へ手を回し、がっちりと固定して揺らす。
結果として僕達の敏感な部分が様々な角度、様々な強さで摩擦を感じ続ける。
汗が噴き出す。
呼吸が荒くなる。
僕の動きと同調するように規則的だった翼の声が乱れる。
声にならなくなる。
それでも、この瞬間を永遠に引き伸ばすよう、僕達は耐えていた。
僕も翼も苦しいけれど、一番幸せな時間。
僕は目を開けることもできなかった。
全身の筋肉が緊張する。
もうすぐ限界を越えてしまう。
もう越えていたのかもしれない。
それでも僕と翼は一緒だった。
一秒でも長く一緒に居たかった。
でも――
「くっ！」
僕は下半身からの快感に耐えられなかった。
「んんっ」
それに応えるように声を出す翼。
「ん、中でピクピクしてるの――わかるよ……嬉しいな……」
「翼――」
僕は急激に薄くなる快感を名残惜しく思いながら、翼を抱きしめていた。翼はまだ気持ちよさそうで、声にならない声を聞かせてくれている。
「んんん、暦、んんっ……んっ……」
翼は目を閉じたまま眉間に皺をよせ、ときどきお腹のあたりを痙攣させながら余韻を感じている。僕

はそのお腹を優しく撫で、少しだけ丁寧な抽送を繰り返す。
更に痙攣が続く。
「ん、んんっ――んっ、ああっ」
――翼の気持ちいい時間が終わると、呼吸を整えながら、僕の胸に頬を寄せ、
「暦、暦……えへへ……暦――」
なんて、名前を何度も呼んでくれるのだった。
――呼吸が落ち着いても、僕達はしばらくそのままでいた。
「ああ――もう一度して欲しいなあ。えっへー、気持ちよかったあ」
満足気な顔でそんなことを言いながら、翼は甘えてくる。
「ん、時間的に難しいかな。僕もほら、もっとしたいんだよ」
「えへへ、ほんとだ――でも、そうだよね」
翼は可愛い、ちゅっというキスをしてくる。
「ん、ごめんな」
「いいの」
僕も同じようなキスを返した。
「あっはー、なんか、こんなの、幸せだなあ」
なんか照れ照れになっている翼。
照れ隠しの頬擦り。
互いの照れを互いに擦り付けるような。
二人の妙な恥ずかしさが薄れ、僕の目が翼の目に合うと、
「そうだ。ねえ、暦。ごめん。お話があります」
と、急に思い出したように、わざとらしい感じで、子供みたいな言い方で翼は言った。
「ん？」
「えへへ、ごめんね。暦。――私、ちょっと浮気しちゃったんだ」
――翼は僕に、なんでもないことのように、あっけらかんと告白した。

014

「サ、サインください――僕はキメ顔でそう言った」
戦場ヶ原ばりの無表情に頬を赤らめて、斧乃木余接ちゃんはキメ顔でそう言った。
「な、なんじゃ？　も、勿論かまわんぞ」
ちょっとだけ動揺しつつも、書き慣れた様子でスラスラと差し出された色紙にサインをする忍を、余接ちゃんは無表情だけど明らかに嬉しそうにキラキラとした目で見つめていた。
「旧ハートアンダーブレードちゃん。いや、今は忍ちゃんか。余接、例のラジオのファンでな、毎週熱心に聴いとるんやで」
余接ちゃんの頭を撫でながら、影縫余弦さんはいい笑顔で言った。
「そ、そうかそうか。では、番組ノベルティの特製疑似餌もやらんといかんの！　カカッ！」
色紙とノベルティグッズを余接ちゃんに渡し、握手をしている忍と余接ちゃん。
余接ちゃん大喜びである。
忍も、なに上機嫌になってるんだ。
てか、ファンって。
――ここはかつて忍野メメと忍が住んでいた学習塾跡の廃ビル。
僕達は今、影縫さんと余接ちゃんに初めて会っている。丁度お互いの自己紹介を終えたところだった。
影縫さんと余接ちゃんは忍野からの紹介で、わざわざこんな田舎まで来てくれたのだ。
影縫さんは忍野の古くからの友人とのことだった。余接ちゃんは影縫さんのパートナーで、影縫さんは、ま、妹みたいなもんや。と、言っていた。そのときの話では、この子もまた怪異なのだそうだ。
「まあ、忍野くんに連絡なんて普通は付けられんわ。

ラジオとは考えたもんやな。忍野くん自身が聴いてなくても、まわりの人間は聴いてるもんなあ」
「ふふん、儂の芸能生活も捨てたもんじゃなかろう」
「最初に気付いたんは余接なんやで」
「なに、そうなのか。ではゴールデン疑似餌もやらんといかんの！」
余接ちゃん、ぴょんぴょんジャンプしながらの大喜びである。もう泣き出さんばかりの。
……随分とノベルティグッズが充実している番組みたいだな。
「ていうか出し惜しみしてんじゃねえよ」
「いや、儂もあまりセコいことはしたくないのじゃがの、大盤振舞いするとPが怒るのじゃ」
忍は珍しくコソコソと、僕に耳打ちするようにして言った。
「八九寺が？　え、だってお前の方が怪異としては上なんじゃないのか？」
「まあ、それとこれは別じゃ。ここだけの話じゃがの、あやつ――怒らせると怖いぞ。あるじ様も気をつけることじゃな」
よくわからないヒエラルキーがここにも存在するようだった。
翼と戦場ヶ原。
忍と八九寺。
うーん……。
まあ忍と八九寺は仕事の関係というやつなのかな。八九寺の奴、かなりの権力を持ってるみたいだしなあ。二人共見た目は子供なのに、なんだかやたらと大人な話だ。
「それにしても、これは珍しい……ややこしい話やなあ」
大人の影縫さんは少し困ったように言った。
「こんなケースは初めてだよ――僕はキメ顔でそう言った」
むしろ忍から色々貰ってるときの方がキメ顔だっ

た余接ちゃんである。
「すみません、僕達だけではどうしようもなくて」
「まあ、それは気にせんでええわ。いやな、ぶっちゃけな、本来うちらはおどれらのような不死の怪異を殺すのが生業なんよ。こないな感じでな」
影縫さんは寄り掛かっていた壁を破壊した。
一撃で。
寄り掛かっていた壁から自然に一歩二歩離れ、振り向きざまの一撃で。
鉄筋コンクリートの壁はまるで発泡スチロールのように、いや、まるで豆腐のようにぼろぼろと崩れてしまう。
鉄筋が入ってるコンクリートって、こんな風に崩れるものなのか？　ＮＨＫか何かの番組で地震で崩れた建物を見たことがあるけど、こんな崩れ方はしてなかったぞ……。
僕が正真正銘の吸血鬼だった頃でも戦いたくない相手だった。
「そんなわけでなあ、今回みたいなややこしい話は苦手といえば苦手なんや。せやけど、もう少し驚いてくれてもいいと思うんやけどなあ。折角サービスでコンクリ破壊したんやから」
サービスだったんだ！
「いや、内心ドキドキですよ」
本当にドキドキだった。正直、今の状態で襲われたら何もできないだろう。
「儂はそうでもないがな。ま、戦うなら血を吸ってパワーアップしてからにしたいがの」
忍は不敵な笑いを見せながら言う。
余裕の貫禄だった。
「さすが鉄血で熱血の怪異の王やな」
忍のことは良く知っているようだった。僕はあえて訊かないでいいことを、思わず話の流れで訊いてしまう。
「僕達は、僕と忍はどうなんですか？　退治しないでいいんですか？」

「まあ、おどれらは忍野くんが解決済みやしな。そもそもが忍野くんの頼みやし。ゴールデン疑似餌まで貰っておいて、そないなことはできんやろ」
忍野はともかく、ノベルティグッズで命拾いするって……微妙な気分だ。
「大体、今回の仕事は……うちらが呼ばれた理由は、おどれらやあらへんやろ」
「はい」
「ああ、仕事というてもこの件は只でええで。暴れる必要もなさそうやし、忍野くんの紹介やし、色々貰ったしな。ま、うちらも観光感覚や。忍野くんの話やと、忍ちゃんは観光みたいなもんでここに来たんやろ？　後で観光名所でも教えて貰おか」
「すみません。ありがとうございます」
「むう、この町は意外と何もないぞ。儂もなんでここに来たのか忘れてしもうたくらいじゃ」
首を傾げる忍。
「おい！　お前、そんな適当にこの町へ来たのかよ！」
まあ、忍の場合は観光名所というより、例の神社みたいな場に引き寄せられたりしたのかな。
「ま、あてのない旅なんぞそんなもんじゃ」
それにしてもいい加減な――
僕と忍の馬鹿なやりとりをニコニコと見ていた影縫さんは真面目な顔になって言う。
「――けどな、難しいで、これは。忍ちゃんに喰ってもらうちゅう選択をしなかった時点でまあわかってると思うけど、この手の怪異は、まあ本人の願いがないとな、まず出会うことがないんや」
「ええ、無理に剥がすと副作用が怖いということですね」
「そうや。なんや、忍野くんに色々教えてもろてるのかいな。ま、忍ちゃんもよく知ってろやろけどな。でな、まあそもそもな、本人の願いがないとな、まず出会うことがないんや。出会ったとしても、願わん限り、想いが無い限り実現することはない。それになあ――まあええか。ああ、例外はあるで。無条

件に出会う運が悪かったとしか言えない場合もある。ま、今回の件は、そこまでやない。いや、そうやない――かな。まあ『蟹』の話と似とるけどな。ああ、蟹の件は忍野くんに細かいこと聞いてないで。彼はちゃんとしとるからな。プライバシーは大切や。それは安心してええ」

「じゃあ、対処はできるんですね」

僕は少し安心した。

「ただなあ――本来のうちならな、本来やないかな。まあええわ。その火の鳥のお嬢ちゃんを退治して済む問題なんや。せやけど、そんなことしたらお兄やん、うちらを殺すやろ。うちらも殺される気もないけどな」

本気の殺気だった。

僕は翼をかばうように前に出た。翼が僕の腕を強くつかむ。

「それはもちろん」

影縫さんの殺気が嘘のように消える。僕は影縫さんが僕達を試したように感じた。

「そない殺気立たんでもええ。いや悪かった。本来でもそのお嬢ちゃんは殺さへんよ。後天的なものやし、さっきも言った通りうちらの担当ともちょっと違うしな。それに繰り返すけど、おどれらも気付いてるように、その怪異はそのお嬢ちゃんが強く望んだ結果や。強く願い続けている結果や」

影縫さんは、翼を見ながら言った。

「暦。私、このままがいいな。ほら、別に重さがなくなるとかないし。普通に暮らせてるし」

翼は強い目で僕を見る。

僕の言うことを、お願いを聞いてくれない目だ。

翼はこうなると絶対に引かない。

そう、翼は浮気をしたのだった。

僕以外の怪異に魅入られてしまったのだ。

火の鳥。

フェニックス。

異形の羽。

不死の怪異――

「いや、お嬢ちゃん。普通には生きられへんで。その怪異はな、死なないというより身体が成長しなくなるんや。身体の時間が止まってな。あれや、昔話でよくあるやろ。一番有名なのは一寸法師やな。ありゃあ火の鳥に魅入られた子供が成長しなくなった話や。あれも残酷な話なんやで。成長しない子供は親からも見限られ、仕方なく家を出るしかなかったんやな。決してめでたしめでたしのハッピーエンドな話やない。まあ話を戻すけど、お嬢ちゃんは理屈では永遠に近い時間生きられるやろうけど、一生、いや永遠にその鬼のお兄ちゃんと過ごす気か？　ま、そのつもりなんやろな。飽きたら一人で生きるのもいいやろけど。ただな、楽しい時間は一瞬で過ぎるわ。人生そんな時間だけやないやろ。苦しい時間はもっと長く感じるんやで。それに身体の時間が止まってるんや。子供も作れへんで。もっとも作れたとしても子供の方が先に死ぬのは苦痛だろうけどな。そんな生き方は鬼のお兄ちゃんも望んでないと思うで」

翼は自分のお腹を撫でるように押さえている。

「それでも私は――」

……。

「それでも私は――」

子供が泣きながら我侭を言おうとするように、言葉が続かない。

普段の翼からは考えられない光景だった。

……。

……。

沈黙を破るように、影縫さんは言う。

「それにな。鬼のお兄ちゃんみたいに身体能力が上がるわけやないからな。本当に永遠に生きられるかは微妙なところやしな」

「……そ、それは、事故に会ったり病気になる確率は一定だからですか？」

翼は、まるで予想でもしていたように、さっきまで言葉が出なかったのが嘘のように言った。

「そうや。なんや、お嬢ちゃん賢いな。なら話が早い。そういうことや。学生時代に忍野くんやら貝木くんなんかと、このあたりの話は色々議論したことがあってな……とはいえ、まあ、運がよければ永遠に近い時間ではあるやろうけどな」

影縫さんは一呼吸おいてから優しく続けた。

「ま、今すぐ答を出せるわけでもないやろ。とりあえずは帰って、落ち着いて考えるといいわ。うちらは、まあ一ヶ月はこの廃ビルに居る予定やから、好きなときに相談しにくるとええ。ま、幸い対処は簡単なんやけどな。お嬢ちゃんが納得すれば、うちらにもできるようなちょっとした儀式でその怪異は出ていくわ。強い想いに依存してるタイプやからな。それだけや。無差別に魅せられるタイプならな、それこそ力技しかないんやけど。運は悪かったが――いや、運がよかったんやろな。なあ、お嬢ちゃん」

――僕達は影縫さんと斧乃木ちゃんにお礼を言い、とりあえず僕の部屋へ戻った。その帰路は沈黙が全てを支配していた。

翼と僕はベッドに腰掛けている。

「ねえ、暦。忍ちゃん、ごめんね。私も仲間に入れて」

忍は僕の勉強机の椅子に座っていた。

全員の目線は同じくらいの高さである。

「いや、それは許さぬ。うぬには、まっとうな人間に戻ってもらう」

その視線は、その声はキスショットの頃のような厳しいものだった。

「忍ちゃん――」

翼は悲しそうな表情だった。

そして泣き崩れてしまう。体育倉庫以来の、僕達の初体験以来の――翼の泣き顔。

翼が泣き崩れる瞬間、反射的に僕の身体は翼を抱いていた。

「嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌、嫌――嫌だよう」

我侭な子供のように、駄々をこねるように、泣き

ながら――壊れたように同じ言葉を繰り返す翼。
　そんな翼を、僕達を、駄々をこねる子供をあえて無視する母親のように、忍は優しい声で、
「あるじ様よ、そろそろ潮時ではないのか。あの小僧も言っておったであろう。おまえ様はいつでもそ、の気、になれば、完全な人間に戻れるんじゃ。委員長まで巻き込むことはあるまい」
　と、言った。
「でも、忍。僕は誓ったんだ。お前が死ぬときは僕が死ぬときだ。お前にも言っただろう」
「ふん、そんなこと――一々覚えてられんわい」
「忍っ――」
「では、委員長を救わんのか。怪異に取り憑かれたままにするのか。そのまま儂とおまえ様と委員長で永遠に生きるか？　それはそれでいいかもしれんが――」
　そんなこと、できるわけがなかった。翼まで巻き込むわけにはいかない。
「それにのう、こんなことは言いたくないのじゃが――」
「な、なんだよ」
「委員長の話は、いささかおかしいじゃろう。あの小僧の知り合いの女も気付いとったようじゃが、そんな自然に、偶然に火の鳥に出会うものかのう」
　確かに――話が出来過ぎていた。でも、だからって――
「い、いや、だって、だからって翼が何か出来るわけでも――」
「そうかのう――じゃが、おまえ様よ、そもそも儂と出会ったきっかけはなんじゃったかのう。まあ、あの小僧のようなプロではないがの。素質のようなものは、あの小僧が恐れをなすくらいじゃったろ」
「つ、翼――」
「――だ、だって、暦とずっと一緒に居たかったから。離れるのは嫌……もう一人になりたくないの」
　翼にとっては難しくない儀式だったらしい。儀式

といってもよくある悪魔召喚のようなものではなく、RPGでいうエンカウント確率を上げるようなものらしかった。

それでも、引き当てる確率は万に一つといった所で、それでも、それを引き当ててしまうところが翼なのだろう。

僕とキスショットが出会ってしまったように。

僕と翼が出会ってしまったように。

「ま、細かいことは聞くまい。儂のせいでもあるからの。怪異は怪異を呼び寄せるという奴じゃ」

でも、まさか。

だから。

だから、翼は——

「だからこそ、あるじ様よ、そんなことができるおまえ様ではあるまい——今なら間に合うんじゃ」

僕は震えている翼を強く抱いていた。いや、僕が抱かれていたのかもしれない。

忍はそんな僕達に容赦をしなかった。

「なあ、儂はもう十分に——」

僕は心を潰されるような気がした。

心の隙を蝕むその声は、その絶妙なタイミングは、確かに吸血鬼のものだった。

「うるさい、言うな！　お前は僕の従僕だ！」

最悪の受け答えだっただろう。

「ふん、女の前では相変わらず我侭じゃの。じゃが、そんな我侭が許されると思うのか！　委員長を化物にするんじゃぞ。子供も産めなくするんじゃぞ！」

表面上、翼が望んだことではあるが、原因は僕にあるのだ。

僕があのとき翼を求めなければ——

言い逃れなどできるはずがなかった。

「頼む、言わないでくれ——頼む——」

このときの僕はただただ懇願するしかなかったのである。

015

「ねえ、お母さん」
「ん、なあに？」
「忍野のおじちゃん、今日来るんだよね？　まだ来ないのかな」
「ん、ちゃんと今日来るから大丈夫だよ。もう、本当に大好きなのね」
「うん！　忍野のおじちゃん、いつもドーナツ買ってきてくれるもん」
　ピンポーン
　呼び鈴が鳴り、私と娘が出迎える。狭い部屋を借りているので出迎えるという程でもないけれど。
「あ、忍野のおじちゃん！」
「やあ、お嬢ちゃんお久しぶり。はっはー。相変わらず元気だねえ。何かいいことでもあったのかい？」
「忍野さん、お久しぶりです。どうぞ上がってください」
「やあ、委員長ちゃん、いや、奥さんだね。はは、どうも昔の癖が出ちゃってねえ」
　暦も私の後から挨拶をした。
「ああ、忍野さん、久しぶりです」
「家族総出で出迎えられるとは照れるねえ。それにしてもやっぱり阿良々木くんに、さん付けされると気味が悪いよ。なかなか慣れないね」
「そう言わないでくださいよ」
「しかし、ドーナツを見ると色々思い出しちゃうねえ。はい、おみやげだよ。お嬢ちゃん」
「ありがとう！」
「なんじゃ、儂の分はないのか」
「もう、忍ちゃんったら、みんなで分けるから大丈夫だよ」
……。

「――こんなお話もあったのかもしれないね、暦」
「ん、やっぱり赤ちゃん欲しかった？」
「ときどきね、ちょっとそう思うことはあるかなあ――でも、いいんだ。暦と忍ちゃんと、ずっと一緒だもん。嫌だよ私だけおばあちゃんになっちゃうなんて。それに、また一人になるなんて耐えられない」
「巻き込んじゃってごめんな」
「あっはー。またそんなこと。私にはこれが一番よかったんだよ。ていうか、私の我侭だったんだから。えへへ、暦に秘密で色々しちゃってたしね」
「まったく、うぬらは――仕方のない我侭っこじゃよ。本来、儂が楽をするはずだったんじゃがのう。よいわよいわ。最後まで甘えるがよい。いざとなればの、儂が楽に殺してやるわい。うぬらのような化物相手にはよく切れるぞ、儂の『心渡』は。痛みも感じさせぬわ。カカッ」
「ああ、悪いな忍」
「ごめんね、忍ちゃん」
「気にせんでよい。安心せい。乗りかかった船じゃしな、ま、儂もそれなりに楽しんでおるしの。む、それよりも今日は偶数日ではないのか」
「あ、そうだった。ごめんね忍ちゃん」
「今日は儂の担当じゃからな。カカッ」